UN ECOSOC

General Consultative Status

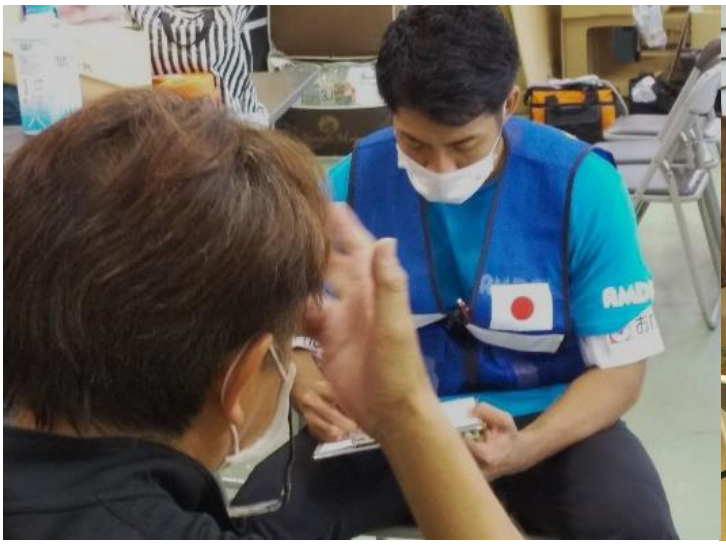
国連経済社会理事会総合協議資格

AMDA

令和２年７月豪雨（熊本県球磨地方）被災者緊急支援活動報告書

2020 年 11 月作成

救える命があれば
どこまでも



AMDA グループ 代表／特定非営利活動法人 AMDA 理事長

菅波　茂

気候変動による水災害は全国どこでも発生します。地震は局所的に生命に関わる大被害を起こしますが、水による災害である洪水は家屋や田畑などの物的損害を広範囲に引き起こします。この物的損害は災害保険だけではカバーできません。多くの被災者の方々に人生の重荷を負わせることになっています。相互扶助は日本の風土です。近年は全国的に災害ボランティアの活動が盛んになってきています。２年前の西日本豪雨災害では岡山県総社市との連携のもとに避難所における被災者の方々の医療面における支援を多くのボランティアの方々と実施しました。しかし、今回の熊本豪雨災害は新型コロナ災害とのダブル災害となったことが特徴です。新型コロナパンデミック騒動により他県からのボランティアが県境を越えて活動することに大きなストップがかかりました。一方、AMDA は岡山県総社市と熊本県熊本市の災害支援関係にもとづいて総社市と共に被災地へ出発、医療支援を実施することができました。避難所の運営は一義的に自治体と自主防災組織が行っています。この点を無視して勝手に医療活動を行うことは徐々に難しくなってきています。その他にも法律による多くの規制事項があります。平時と災害時では状況が全く異なることがあります。平時の法が災害時には大きな障害になることもあります。この場合の解決は自治体のみができます。国内の災害支援活動には自治体との連携が非常に大切であるとの認識が不可欠です。

避難所におられる被災者の方々は大きな精神的ストレスと身体の疲労感を持っておられます。この状況に対して大変喜ばれるのが鍼灸やマッサージ、柔道整復術による治療です。両者ともに優れた患者さんとのコミュニケーション能力を持っている治療方法だからです。心身ともに落ち込んでいる時に身体に触れてくれる治療と会話によるストレス発散を何より心地よく感じるとのことです。勿論、鍼灸とマッサージ、柔道整復術の治療に関する理論は異なります。しかし、被災者の方々の満足度は両者共に高いレベルです。災害医療対応の一環として両者の積極的な導入の推奨をします。

災害はもはや特別な出来事ではなくなってきています。従来の考え方や方法論では被災者の方々に対してお役に立つレベルが下がってきています。役に立つ新しい考え方や方法論をどんどん導入する必要性が高まっていると思います。AMDA としては多様性の共存を推進できるプラットフォーム方式で問題解決に尽力をしたく思っています。今回の支援活動にご尽力下さった皆様に心からの感謝を申し上げるとともに、球磨地区の一日も早い復興を願っています。

岡山県総社市長　　片岡　聡一

７月４日午後、テレビに映る球磨川の氾濫が目に飛び込み、瞬間、２年前の総社市を襲った豪雨が蘇り、いてもたってもいられなくなった。すぐに私は菅波代表に電話し、２ 年前の恩返しをするため、明日熊本へ支援に行けないかと投げかけた。菅波代表から「やりましょう」と返事は10 秒かからなかった。

同日の午後 ４ 時、市役所に幹部を招集。AMDA・総社市・赤磐市合同チームによる職員派遣を決定した。

今回の派遣は、単なる豪雨災害の支援ではなかった。立ちはだかる課題が２つ。まず１つは数十年に１度の大雨特別警報が長期継続する恐れがあるという異例の事態。もう１つは、コロナ対策だ。その大きなテーマと向かい合わなければならなかった。

総社流の支援のセオリーは、当然発災の翌朝出発だが、今回は物資を届けようにも、九州には線状降水帯が長期間停滞すると予想されていたため、派遣職員の安全を確保するためにも１日置いた６日に出発せざるを得なかった。

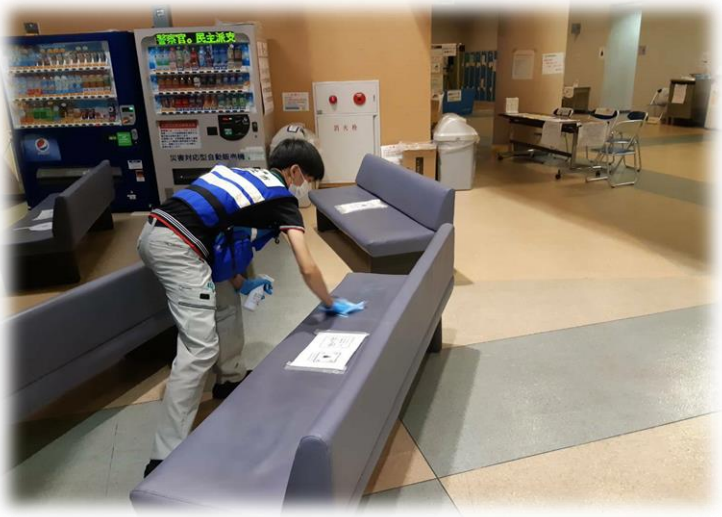
前後して、熊本市の大西市長から私に一報が入る。「人吉市に入ってほしい」という依頼だった。総社市議会がかつて視察に行った関係もあり、支援先を人吉市に絞ることにした。

熊本市とは昨年、台風被害のあった千葉県君津市や福島県相馬市に合同で支援に入った経緯もあり、現地では大きな信頼関係のもと、ストライクゾーンの定まった支援活動を行うことができた。

第 １ 陣は支援物資を運んだ。物資支援は手慣れたものである。なぜなら我々も被災しているからこそ、初動で一番欲しいものがわかっているからだ。さらに今回は、コロナ対策として、マスク１万枚を提供することも忘れなかった。

第２陣は８月２日から９月１日まで計 15 人の職員を人吉市最大の避難所である人吉スポーツパレスに派遣した。約 350 人の避難者を責任もって預かる我々に与えられたテーマは生活支援と同時進行で行われるコロナ対策。避難所では、むしろコロナ対策のウエイトの方が重く、受付での検温、手洗い、面会者の案内、トイレ清掃、そして、机やドアノブ、自動販売機に至るまで、人が触れる部分を消毒するのが大きな任務だった。そのような神経質な支援の中、被災された方から「総社市は一昨年大変だったね。今回はありがとう」と感謝された言葉は我々の疲れを吹き飛ばしてくれた。

また、総社市民に対しても、コロナに関する説明責任を果たす必要もある。派遣職員が，人吉市民に対し、コロナに感染させないこと、感染しないこと、それを証明しなくてはならない。そのため、支援の出発前と帰還後に 15 人全員がPCR 検査を受け、さらに帰還後は陰性であっても １ 週間はホテルなどで待機し、他との接触を絶つという処置をとった。



人吉スポーツパレスでコロナ対策を担当した総社市職員

豪雨災害とコロナが重なったとき、その支援には感染防止という責任も付きまとう。今回は人吉市の方々に恩返しをするというミッションと同時に、コロナ禍での避難所運営という新たな経験則を得ることができた。

とても重く、とてつもなく重要なミッションだった。

岡山県赤磐市長　　友實　武則

「困った時は、お互い様」「今回は私たちが手助けさせてもらいます、私たちが困った時にはお願いします。」赤磐市は、この精神を大切にしており平成29年に「赤磐市大規模災害被災地支援に関する条例」を制定し被災地支援活動を行っています。

7月4日（土）に発生し、ほぼ1か月間にわたって熊本県を中心に日本各地で発生した「令和2年7月豪雨」に対し、赤磐市は7月6日にAMDA・総社市と共に熊本県への支援ニーズ把握を行うべく職員を1人派遣しました。

何とか熊本県に入った職員は、人吉市内の中学校に身を寄せる球磨村からの避難者・村職員の方々からお話を聞くことができました。

村役場が浸水、機能停止し村内に避難するところが無く人吉市まで避難して来たこと・各種物資が不足していることをお聞きした職員はすぐに私に報告し「100人以上の避難者、職員共に疲弊しており速やかな物資の支援が必要。」と訴えました。

隣の市とはいえ、自分たちの住む村の外に避難せざるを得ない、また、物資も心許ないという状況の避難者・職員の方の心情を慮り、職員に対してすぐさま支援内容の検討を行うよう指示しました。

7月10日職員1名と段ボールベッド・飲料水・地元県立瀬戸高校生の思いがこもった「防災飴」などを持ち現地に向け出発、無事予定通りに人吉市に入り物資を引き渡しました。

特に喜ばれたのは、野菜ジュースの他、粉ミルク・液体ミルクです。災害時の避難所において乳幼児への対応に注力しなければならないことを強く感じました。

引き渡しを終えた職員は、村内のさくらドームで災害対応の陣頭指揮を執る松谷浩一球磨村長にお会いして支援報告をさせていただいたようです。

松谷球磨村長は、遠方からの支援に大変感激され、お忙しい中わざわざ私宛にお礼のお電話をくださいましてかえってこちらが恐縮しました。

また、新型コロナウイルス感染症による感染防止のため、AMDAからの依頼により赤磐市内の事業者が扱うオゾン発生装置についても貸し出し対応を行いました。

もはや災害は「非日常」ではなく「日常」になりつつあるのではないかと考えており、いかに常日頃から職員1人1人が災害への関心をもち、その準備を行うことができるか、その大切さを痛感するところです。

球磨村を始めとしてこの度の豪雨災害に遭われた方々におかれましては、自身の健康に十分留意され、1日も早い復旧・復興を祈念いたします。

支援物資を渡す赤磐市職員

熊本県人吉保健所　所長　　劔　陽子

この度は、発災後早期より多大なるご支援を頂き、ありがとうございました。災害時には、様々なポリシーを持つ支援団体が入ってきますが、それぞれが、バラバラに活動をされると、収集がつかなくなります。AMDA さんには度々保健所に寄って下さるなど、地域の仕組みを尊重した活動をしていただけました。当然のことのようですが、これがなかなか難しく、災害支援経験が豊富な団体だからこそだと思います。

最初は、人吉市内の避難所等の支援をして頂いていましたが、その後、人吉市や球磨村ほどの規模ではないものの、住家被害も大きく、多くの住民が避難していた相良村の支援に入っていただきました。報道では被災の程度が大きいところばかりに注目が行きますので、相良村のようなところはとてもきつい思いをしているのにも関わらず、見過ごされがちです。保健所もなかなか手が回らない中、AMDA さんが親身に村の保健師さんに寄り添い、保健活動を進めるお手伝いをして下さいました。本当に感謝しています。

相良村で保健活動を行う地元保健師と AMDA 派遣者

実は、私も 1997 年に AMDA よりバングラデシュのサイクロン被害支援活動、ミャンマーでの保健活動に派遣して頂きました。その時の経験が、その後の私の公衆衛生人生の大きな礎となっています。今後の AMDA の益々のご発展をお祈り申し上げます。

相良村教育長・緒方医院　緒方　俊一郎

7.4 球磨川豪雨水害は線状降水帯長時間球磨地域の上に留まった事によって球磨川流域全体へのかつてない多量の雨を降らす事によって引き起こされた。過去にも昭和40年、47年と相当な洪水被害に見舞われて多くの被害を経験していたが、今回はそれに勝る洪水であった。

７月３日夕方から激しい雨が降るために洪水が起りはしないかと気が気ではなかった。夜になると雨はますます激しくなり、深夜にさし掛かる頃には風呂桶をひっくり返すような豪雨となった。日にちが７月４日となると緊急避難勧告が発令された。続いて相良村職員全員に緊急招集がかけられた。

午前５時過ぎには人吉市上青井町で球磨川の氾濫が起こった事が緊急放送され、球磨川のいたるところで次々に川の氾濫が報告された。相良村でもいくつかの集落で川辺川の氾濫が起こったが住民自身や周囲の人々の適正な判断と行動更に協力によって死者を出す事がなかったのは幸いであった。固定電話ばかりではなく携帯電話も一時不通となり停電も地域によっては長時間続いた。

総合体育館を始めいくつかの指定避難所に 150 世帯 250 人をこえる人たちが避難してきた。このほかに親類縁者を頼って避難した人も多数あった。夜が明けると球磨村の施設や人吉市、八代市坂本町などで多数の死者行方不明者のニュースが入ってきた。

７月６日に岡山大学公衆衛生学教授頼藤貴志先生から電話があり、今回の豪雨災害に AMDA からボランティア活動の申し入れがあった。頼藤先生と岩尾智子さんが支援物資を携えて来て下さったので相良村の状況をお伝えした。相良村の保健師が多忙で家庭訪問が出来ていないことから、岩尾さんはもう一人の看護師さんと被災家庭を訪問して綿密な聞き取り調査をしてくださった。発災後 3 ヶ月後の現在、そのデータを基に担当者を配置して被災者の生活再建支援事業を開始している。AMDA のすばやい対応が大変役立っており、ありがたいことであった。

尚、7 月の中ごろに球磨村の避難所の一つである人吉市の第 1 中学校体育館を訪問した。そこには同じく AMDA の看護師さんに加えて鍼灸師さん、柔整師さんのチームが活動されており、心身ともに疲労されている被災者の皆さんから大変喜ばれていた。

緒方先生(左)と AMDA 職員 岩尾(右)

これまで AMDA の名前を聞いた事はあったが、具体的な活動については不明であった。今回身近にメンバーにお会いし、素晴らしい活動を目の当たりにして心強く、頼もしく思った。

あらためて AMDA の皆さんの活動に感謝し、お礼申し上げます。

洪水発生、その時 AMDA は―

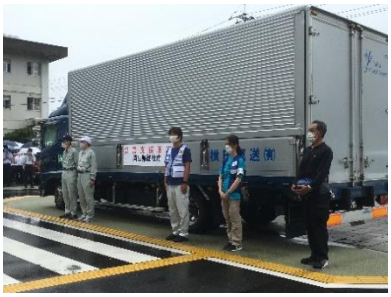
2020 年７月４日早朝、熊本県、鹿児島県に大雨特別警報が発令。
その後、熊本県・球磨川が氾濫し、同県南部を中心に洪水が発生した。6 日時点で死者 20 人、住宅被害 242 棟が確認されていた(内閣府発表)。
この深刻な状況を受け、熊本県熊本市からの連携支援要請を受けた岡山県総社市より、AMDA へ医療チームの派遣要請があった。同月 6 日、AMDA より医師１人、看護師２人、調整員(岡山県赤磐市職員)1 人を含む、「総社市・赤磐市・AMDA 合同チーム」は熊本県人吉市に向け出発した。

災害発生時の熊本県人吉市の様子

この災害により、2020 年 11 月 2 日現在、死者 84 名、住宅被害 16,593 棟(全壊 1,599 棟、半壊 4,351 棟)と、非常に大きな被害が発生した(内閣府発表)。

※AMDA は総社氏・赤磐市と各々連携協力協定を締結、今回の災害派遣もこの協定に基づくものである。

活動概要



総社市での出発式

人吉市医療調整会議(下)

AMDA チームは 6 日熊本県人吉入りし、人吉保健所及び人吉医療センターでの各医療調整会議に参加。
当日夜より球磨村の避難所である「さくらドーム」にて活動を開始。熊本県にも登録の上、主に以下の活動を実施。AMDA からは医師等 11 人を派遣した。

人吉市・球磨村

- 避難所での診療・健康相談
- 物資提供
- 避難者情報・要支援者情報整理
- 災害鍼灸・柔道整復師による施術

相良村

- 保健師支援
- 物資提供

今回の活動の流れ

月　日	熊本県人吉市・球磨村				熊本県相良村
	医療支援		災害鍼灸・整骨支援	物資支援	保健師支援
7月4日	4:50　熊本県、鹿児島県にて大雨特別警報発令。				
7月5日	AMDAより医師1人、看護師2人、調整員（赤磐市職員)1人の熊本県人吉市への派遣を決定。				
7月6日	9:41 看護師1人、岡山駅出発。 11:25 博多駅にて医師1人と合流。熊本へ。				
		12:00 看護師1人、調整員（赤磐市職員）1人が総社市職員2人と総社市出発。岡山駅から新幹線で熊本へ。			
	午後、人吉市到着。人吉保健所での「第1回人吉球磨地域災害時保健医療調整会議」、人吉医療センターでの医療調整会議に参加。	夕方、熊本駅到着。 →人吉市を目指す予定だったが、悪天候のため、この日は熊本市泊。			
	夜間、球磨村「さくらドーム」にて、当直に入る。				
7月7日	午前中も引き続き、「さくらドーム」にて活動を実施。				
	午後、4人合流。「さくらドーム」近くの寿泉寺で自主避難されている方の健康状態の聞き取りを実施。				
7月8日	球磨村の方が避難している人吉市立第一中学校（以下、第一中学校）入り。熊本県職員、熊本県・球磨村の保健師、その他医療支援団体と協力し、医療支援活動を実施(~10日午前中まで）。				
7月9日			調整員2人（うち1人柔道整復師)、鍼灸師1人を追加派遣。		
7月10日			人吉保健所での登録後、第一中学校にて鍼灸師による鍼灸・柔道整復師による施術（整骨）実施決定。		
7月11日			柔道整復師による施術（整骨）開始。		
7月12日					人吉保健所長より相良村保健師支援の要請を受ける。保健師、職員と面会。支援決定。
7月13日					保健師支援開始。
7月14日			新型コロナウイルス感染症の影響により一時活動休止。		
7月15日			活動再開・鍼灸開始（～19日まで）。		活動再開(~22日まで)。
7月19日			活動終了。		
7月22日					活動終了。
8月5日				AMDA事務所より、「小規模多機能ホーム菜の花」へ物資を発送。	
8月6日				物資到着。	

活動内容

人吉市・球磨村

月　日	経緯
７月４日	4:50　熊本県、鹿児島県にて大雨特別警報発令。
７月６日	午後、人吉市到着。人吉保健所での「第１回人吉球磨地域災害時保健医療調整会議」、人吉医療センターでの医療調整会議に参加。
	夜間、球磨村「さくらドーム」にて、当直に入る。
７月７日	午前中も引き続き、「さくらドーム」にて活動を実施。
	午後、４人合流。「さくらドーム」近くの寿泉寺で自主避難されている方の健康状態の聞き取りを実施。
７月８日	球磨村の方が避難している人吉市立第一中学校（以下、第一中学校）入り。熊本県職員、熊本県・球磨村の保健師、その他医療支援団体と協力し、医療支援活動を実施(~10 日午前中まで）。
７月 10 日	

診療を行う 佐藤 拓史医師

①避難所での医療支援活動（7 月 6 日 - 10 日）

・球磨村総合運動公園に隣接する「さくらドーム」、さくらドーム近くの自主避難所「寿泉寺」にて避難者の健康に関する声かけを実施。緊急対応の必要がないことを確認。

・8 日より熊本県職員、熊本県・球磨村の保健師、TMAT や DMAT などの医療支援団体と、球磨村の方が避難する「人吉市立第一中学校(10 日時点避難者 116 人、以下第一中学校)」にて活動。AMDA 医師らは蜂窩織炎（皮膚の感染症）や外傷、体調不良などを訴える避難者の診療や健康相談を実施。

・オンコールで、真夜中に避難所の看護師から寄せられる、めまい、外傷、小児の嘔気、不眠症など様々な症状の訴えに対応。

経口補水液を渡す 高看護師

②物資提供（7 月 8 日）

・第一中学校に避難されている方の中に熱中症の症状を確認。緊急で経口補水液を避難者全員分用意。更に、医療資材(マスクや手袋、医療ガウン、フェイスシールド)を避難所に提供。

・AMDA 調整員(赤磐市職員)は物資支援の可能性を念頭にニーズを調査。

→球磨村から避難されている方々が経口補水液を含む飲食物などを必要としていることが判明。赤磐市は 10 日、支援物資と一緒に赤磐市職員を派遣。AMDA 調整員(赤磐市職員)はこの職員と同日夕方合流、第一中学校やさくらドームに物資を渡した。

人吉市・球磨村

月　日	経緯
7 月 9 日	調整員２人（うち１人柔道整復師)、鍼灸師１人を追加派遣。
7 月 10 日	人吉保健所での登録後、第一中学校にて鍼灸師による鍼灸・柔道整復師による施術実施決定。
7 月 11 日	柔道整復師による施術開始。
7 月 15 日	災害鍼灸開始。
7 月 19 日	活動終了。

関係者らとの情報共有をする 山田調整員

③避難者情報・要支援者情報整理（7 月 8 日 - 10 日）

・第一中学校において、球磨村保健師・熊本県保健師の要請により、避難所運営に必要な情報を地元の保健師に引き継ぐため、AMDA 看護師らは保健師らとともに避難者の健康面に関する聞き取りを実施。その結果を DHEAT(災害時健康危機管理支援チーム)らとまとめた。

・最終日前夜から翌日午前中まで、引継ぎを目的に当直に入り、特に注視する必要がある避難者への声かけなどを当直の保健師と行った。

平野柔道整復師による 避難者への施術

④災害鍼灸・柔道整復師による施術(7 月 11 日 - 19 日　*14 日を除く)

・第一中学校での長引く球磨村の方々避難生活を踏まえ、様々な調整の上、10 日には人吉保健所での登録を完了。第一中学校に「ケアルーム」としてベッドなどを整備、翌日 11 日より柔道整復師による施術を開始し、延べ 64 人(内 1 人はテーピング指導のみ)が施術を受けた。15 日には鍼灸師による活動も開始し、19 日までに延べ 21 人（内 1 人は電気温灸器を使用）が施術を受けることができた。

体の痛みなどを和らげるだけでなく、被災された当時のことや将来への不安、悩みなどを吐露する機会となった。

活動内容

相良村

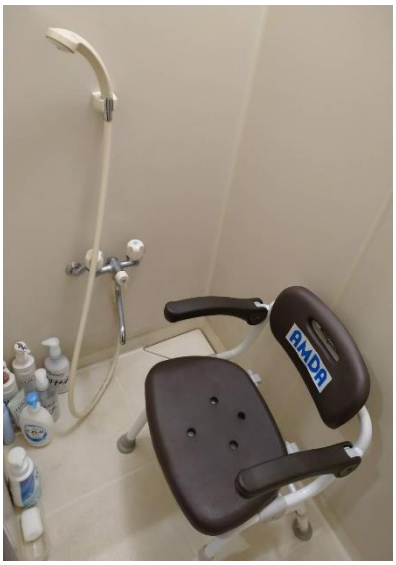
月　日	経緯
7 月 12 日	人吉保健所長より相良村保健師支援の要請を受ける。保健師、職員と面会。支援決定。
7 月 13 日	保健師支援開始。
7 月 22 日	活動終了。

8 月 5 日	AMDA 事務所より「小規模多機能ホーム菜の花」へ物資を発送。
8 月 6 日	物資到着。

各家庭を訪問し調査を行う 岡本看護師

①保健師支援（7 月 12 日 - 22 日　*14 日を除く）

・12 日に人吉市保健所長より人吉市に隣接する相良村の保健師支援について要請を受けた。相良村役場にて保健師及び職員より、「村の一部が前日(11 日)の大雨で再度浸水したこと」、「200 世帯の避難状況、健康状態などが確認できていないこと」、そして「保健師が通常業務と並行して、被災世帯の把握など多くの業務を抱えていること」の事情を伺い、相良村教育長緒方先生のご協力の下、同村保健師とともに戸別訪問を行う保健師支援を実施。
聞き取りする中で、被災当時のこと、現在の感情、将来への不安などのお話も伺った。



②物資提供

・個別訪問等で見た被災状況から「猛暑の中で、家の片付けなど屋外の作業がしばらく続くのではないか」と思い、役場の方にご相談の上、経口補水液など 3 箱を提供した。
・保健師より、避難所のシャワーにシャワーチェアの設置についてご相談を受けた。AMDA は 1 台購入し、31 日に保健師より設置のご報告があった。

※7 月 22 日 AMDA は熊本県での上記活動を一旦終了した。その後、人吉市内で被災しながらも 8 月再開に向け準備を進めている「小規模多機能ホーム菜の花」へ 8 月 5 日に物資を発送、6 日に到着を確認した。この到着をもって、AMDA は緊急支援活動を終了した。しかしながら、現地関係者らとの連絡を継続し、今後は復興支援活動を視野に、更なる支援ニーズがあれば対応していく。

派遣者報告

東亜大学医療学部教授　AMDA 理事　佐藤　拓史

7/6 午後に人吉到着後、人吉保健所にて医療活動チーム登録を済ませた後、人吉市立第一中学校の避難所に移動した。人吉や球磨村の関係各所、避難所内で活動している他の医療チームとの連携は非常に大切で、しっかりとコミュニケーション持ちながら避難所の状況把握に努めた。また、どう寄り添っていけるかを自問しながら、避難してきた方々からお話も伺った。夕方には、人吉保健所において人吉球磨地域災害時保健医療対策会議に出席し、現状把握と今後の活動内容の検討を行った。更にその後に開かれた DMAT や TMAT 等の各医療チームの活動ミーティングにおいて、活動初日から球磨村の避難所である桜ドームでの夜間当直を担当することになった。

AMDA 医療チームの任務は、この災害を乗り越えていく地域の人々のお手伝いになることであれば、医療の枠を超えていける活動でもある。被災地の復興を自分達で成し遂げていく地域の人々の強い意志を感じながら、地域の声を聞き活動を検討していった。当初は、避難所内での環境作り、物質の支援、救護所医療を地域の医療機関と連携しながら行っていたが、7/10 には避難後の疲れやストレスを少しでも緩和できるよう鍼灸や整体のプログラムを導入していった。被災された方々の逆境に立ち向かっている姿を見て、この災害に負けることはないと確信した。

診療を行う 佐藤 拓史医師

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科

疫学・衛生学分野　教授　**頼藤　貴志**

令和２年7月の豪雨より2か月が経ち少しずつ復興してきているさなか、大型の台風が九州地方に近づいてきており、大きな被害が起きないことを祈っているところです。私は、熊本県八代市出身で、令和２年7月の豪雨が起きた際には、まさか球磨川が氾濫をするとは思ってもいませんでした。幸い実家のある八代市街地は大きな被害はなかったのですが、人吉や球磨地方、芦北地方などは報道もされているように被害が大きく、また母親の実家があった八代市坂本村も大きな被害を受けました。八代市坂本村へ被害の状況を少し見に行くこともできたのですが、よく知った土地が荒れ果ててしまっていて声も出ませんでした。復旧には時間がかかりそうだなと思います。

さて私は、7/12 日曜日と 7/13 月曜日のたった2日間しか現地には入っていないのですが、下記2つのことをお伝えしたいと思います。

1つ目は、新型コロナウイルス感染症流行後、初めての大規模災害であったかと思いますが、コロナ禍における避難所運営・支援活動の難しさです。私は 7/12 に人吉第一中学校に入らせていただいたのですが、人吉第一中学校体育館の避難所では、避難されている方がきちんとマスクをされ、各所にアルコール消毒が置かれており、また避難場所も密にならないように設営されていて、最善の対策をされていたことに感心いたしました。そのお陰か、支援に入られた自治体職員の方の陽性報道もありましたが、その後大きな問題に発展しなかったのではないかと思われます。ただ初夏で、そこまで暑くなかったため、換気が十分にできたことが幸いしたとも考えられます。とても暑い、また逆に冬場でとても寒いなど換気を保てなくなる状況で3密（密集・密閉・密接）が回避できないようになった場合の避難所運営はとても難しいのではないかと思いました。また、報道でよく知られているように、県外からの支援もなかなか入りづらくなり、復興への足かせになるのかと思われました。ただ実際には、熊本県内における新型コロナウイルス感染症は、都市部である熊本市内を中心に流行しており、多少なりとも県外からの支援が入った人吉・球磨地方、芦北地方では現在でも、それほど感染が流行していません。適切な感染対策（マスク、手指衛生、3密回避）が行われれば、支援活動によりそこまで深刻な感染の連鎖を引き起こすものではないのかもしれません。新型コロナウイルス感染症の問題は当分続くと思われ、コロナ禍での今後の避難所運営、また支援活動に対して良いモデルとなる事例となったのではないかと思われます。

また2つ目に、印象に残ったこととしまして、7/13 に入らせていただいた球磨郡相良村での保健師支援活動があります。球磨郡相良村には、川辺川という川が流れていまして、球磨川に流れ込むのですが、今回の豪雨により球磨川と川辺川が合流する地域の方たちが浸水被害など多くの被害を受けられました。人吉や球磨地方、芦北地方などは報道もされているように、確かに被害も甚大ですし、だからこそ支援も入りやすいのですが、相良村は注目もされず、あまり支援が入らない状態でした。人吉保健所長の劔先生からのご依頼もあり、相良村へ入った時には、現地の保健師さんが被災したご家庭を回れず途方にくれていらっしゃいました。13 日月曜日に今後どのように各家庭を回ったらよいかを一緒に考え、20 軒ほどのお宅への訪問に同行させていただいたのですが、一日目の訪問の振り返りをした際、全戸訪問の目途が立ったからか保健師さんがほっとされていたのがとても印象に残っております。私たちが何か大層なことをしたわけではなく、見放されていたと感じていらっしゃった現場の方と一緒に考え、一緒に今後の計画を立てたことで安心された

のだと思います。その後、AMDA からの支援もあったのですが、現地の方が行いたい活動を一緒に行わせていただくということが、よい活動につながったのではないかと思います。

最後になりますが、今回の活動におきましては、相良村で長い間地域医療にかかわられ、また相良村の教育長もされていらっしゃる緒方俊一郎先生に多大なサポートを頂きました。この場をお借りして御礼を申し上げます。また、人吉市保健所の劔保健所長にも現場での活動の支援を頂き、お忙しい中ご対応いただきまして感謝申し上げます。もちろん

コロナ対応の指導を行う　頼藤医師

AMDA のスタッフの方々、一緒に現地で活動をさせていただきました皆様、そしてご支援いただいている皆様に感謝申し上げます。海水温の上昇もあり、今後も災害の頻度の増加や程度がひどくなることが見込まれるかと思いますが、過去の経験から学んでいくことができたらと思います。まずは九州に現在近づきつつある台風が大きな被害を起こさないことを願って筆をおきたいと思います。

看護師　保健師　　岡本　美南

今回初めて AMDA の災害救援活動に参加させていただき、「ローカルイニシアチブ（現地主導）」がいかに大切であるかということを学びました。

災害が起こった時、被災地は復興に向け、外部の助けを必要とします。しかしながら、AMDA 含め、外部から来たボランティア団体はずっとその土地に留まっていることはできません。最終的には、被災地の方々が手を取り合い、被災地の方々自身で立ち上がっていかなければ、復興は成しえません。

「郷に入っては郷に従え」という言葉があるように、被災地には被災地の方々が昔から慣れ親しんだ、言葉、慣習、考え方があります。外部から来た私達にはそれはわかりません。外部から来た何もわからない私達が現地の方々の考えを尊重することなく主導したところで、被災地の方々自身が本来持っている、立ち上がる力というものを押さえつけてしまいます。被災地の方々主導の元、外部から来た私達が手を差し伸べるからこそ、現地の方々の立ち上がる力を促し、より早い復興に取り掛かることができる、そう確信することができました。今後、また災害救援活動に参加させていただく機会があれば、このことを忘れずに、今回以上に現地の方々の気持ちに寄り添い活動していきたいと思いました。

相良村の戸別訪問を行う　岡本看護師

協力者コメント

AMDA 災害鍼灸ネットワーク　代表世話人
帝京平成大学 ヒューマンケア学部 鍼灸学科　教授
今井　賢治

東日本大震災より AMDA は鍼灸支援活動を開始した。近年の日本では、ほぼ毎年のように災害が発生し、洪水による被害が続いている。今回も 2020 年 7 月 4 日からの豪雨により球磨川が氾濫し、AMDA は支援活動を行った。これまでの経験から、鍼灸やマッサージによる治療支援が必要になる事を十分に想定していた。しかし、コロナ禍において、その実践が可能かどうか課題であった。当時は、都内・新宿や池袋で感染者が増加しているという報道が連日されており、その池袋に在住勤務している小生は、派遣者として支援活動には参加できない事を悟り、後方支援をすることとした。実際、感染拡大を抑えるため、支援活動は県外からの参加は制限され、熊本県内からの支援者でなされる事となった。AMDA には熊本地震での支援活動を通して、地元鍼灸師による「AMDA 熊本鍼灸チーム」があり、リーダーの吉井治鍼灸師・柔道整復師との連絡を行った。災害鍼灸活動の開始に先立ち、佐藤拓史医師らの助力を得て、さらに、感染症対策には頼藤貴志医師をはじめ複数の専門家の指導とご助言をいただいた。そしてコロナ禍における治療環境の整備やルールとして、手指消毒やマスクの着用、患者移動の動線確保、治療時間の設定、シーツやタオルは患者ごとに替えるなどを行うこととなった。新型ウィルスの感染が広がる中で、避難所での治療支援を行うルール作りができたのは画期的な事柄だと思う。また、避難所である人吉第一中学に派遣された平野晃調整員は柔道整復師でもあり、治療環境の整備を経て 11 日より、柔道整復と鍼灸による治療支援活動が開始された。今回、AMDA は柔道整復を災害支援活動に導入した意義は大きいものがある。災害時における骨折・脱臼・打撲・捻挫や疼痛の管理、テーピングや運動処方などに柔道整復は強みがあるため、鍼灸やマッサージと共に行うことで、より被災された方々への貢献が期待できるだろう。災害鍼灸からマッサージや柔道整復が加わり、いわゆる東洋医療技術を災害支援に導入する状況が AMDA には備わった。西洋医学と東洋医学を上手く用いることで、医療支援の幅が広がり、被災者に大きく貢献できるはずである。さらに今後は漢方の導入も必要と考える。

今回、柔道整復の受療者は延べ 64 名、鍼灸は 21 名という状況であった。今回の活動の経験から、AMDA は(公社)岡山県柔道整復師会との協力協定を締結するに至った。災害支援には多くの連携が必要であり、柔道整復の団体と初めての協力協定が締結され、小生にとっては大きな喜びとなった。

AMDA 災害鍼灸ネットワークについて

AMDA 災害鍼灸ネットワークは、有事の際の円滑な鍼灸活動を目指し設立されました。
AMDA における災害鍼灸活動は東日本大震災から始まりました。災害時に過酷な環境を強いられる被災者にとって、鍼灸治療の役割は大きく、これまで東日本大震災の他、広島土砂災害、福知山広域水害、そして熊本地震において災害鍼灸活動を展開してきました。
AMDA はこれまでの災害鍼灸活動を含む医療支援活動の経験をもとに、今後の発生が想定される南海トラフ巨大地震など大規模災害に備えています。

熊本県人吉市下青井町　宮原はり灸院　院長
人吉市鍼灸マッサージ師会　会長　宮原　信晃

令和２年７月４日(土)午前８時、人吉市内で国宝青井阿蘇神社前の当院は濁流に囲まれていた。
１階の治療室は完全に水没し、その勢いはおさまらず、２階へと増水は続いた。
泥色の水はこれまでの水ではなかった。
まるで形を変える水銀の重みと、全てを飲み込む得体の知れない液体であった。
２階の廊下に濁流は登り詰め瞬く間に泥水の絨毯(じゅうたん)は広がっていく。
妻は２階の部屋の窓枠に、身の高い踏み台で何とか登った。私は２階の外のベランダに居てこれまで見たことのない球磨川(くまがわ)を見ていた。
それからだった。
いよいよである。私から見える川の堤防を、激流が、ドカーン、ドカーンと幾度も堤防を越えた。
「これ以上くれば、ここも危ない」と思い、妻が登る窓枠の外の屋根に立った。
妻は窓枠から足を出して屋根に立った。
尖った屋根の天辺から、もう一段上に登れる、はずであった。
「私は、そこから、どうやって屋根に登れるの？」と妻は私に聞いた。
「僕は登れるけど、貴女は無理やねえ」と私は小さな声で言った。
妻は少し大きな声で、「神様、仏様、もうこれくらいで堪忍してください。もうこれ以上、水が来ないようにお願いします。神様、仏様、もうこれくらいで堪忍して下さい」と何度も何度も言った。
SNSの情報で球磨川の上流にある市房ダムを８時30分に緊急放流するというニュースが流れた。
「こんな時に、なぜ、ダムの水を出すのか！？」。
身の毛のよだつ恐怖の時間は「緊急放流中止」というSNSの情報で薄まった。
あの日の光景は忘れてはならない。
球磨川と共に、これからも生きて行く私たちにとっては、絶対に忘れてはならない日でもあった。
妻の呪文は、これまでで、最高の効き目のある言葉であった。

AMDA 熊本鍼灸チームリーダー　吉井鍼灸師(左)と宮原鍼灸師(右)

あの日から一週間が経った。未だに市内は泥の中にあり抜け出す手立てのない時期でもあった。
各方面からの依頼で人吉一中へ出向いた。被災した人たちが寝泊りしている体育館にAMDAの皆さんがいた。目がキラキラした人たちで白いマスクの奥からわかりやすくこれからの方針を丁寧に教えてくれた。
AMDA災害鍼灸の要といわれる地元への引継ぎである。どこの治療所が開いているかを調べ、伝える作業の依頼だった。今になり、あの日や、あれからの日々を伝えていかなければと思っている。妻の呪文も忘れずに。

派遣者報告

鍼灸院 acupital-アキュピタル-　代表　灰床　宗真

ここ数年九州地方は毎年のように災害に見舞われています。

私は鹿児島県在住で、TV などで被災地の映像が流れるたびに鹿児島でもし同じような事があった時何ができるのか自問自答していました。というのも、小学生の頃、平成5年8月豪雨（8.6 水害）の時、氾濫した甲突川の近くにおり1日半家に帰れないという経験があったからです。

当時は幼く、川から市街地に流れ込む泥水を当時いた建物の2F より何も考えず大人の胸まで漬かった状況をただ、眺めていました。

今考えると、恐ろしい出来事だったなと感じます。

今回も熊本で災害が起きたというのを TV で見ていました。漠然と大丈夫かな、何かできる事はないのだろうかと思っていました。ですが、思うだけでどうしたらいいのか分からない状況が続いていました。

縁があり、AMDA の存在と活動をしり、人吉での災害鍼灸に誘ってただきました。

不安だったのは、被災者さんの精神状態でした。今回、コロナという特殊な状況も重なり鍼灸治療を受けてる場合ではないと思っている人が多いのではないか？と考えていました。

ただでさえ人は自身の健康について侮り、他のことと比べ後回しにしがちです。

そのような思いで現地に入りましたが、先に入っておられた先生方のお力もあってか徒労に終わりました。被災者さんの強さに感動を覚えるくらいでした。

被災者に施術を行う 灰床鍼灸師

今回、1日だけのお手伝いでしたが、看護師、柔道整復師、鍼灸師という兼ねて仕事上重なることの少ない職種のメンバーがチームになり活動しており心強さを感じました。

３つのコンセプトを実感するには足りない活動時間でしたが一端でも関われて良かったと思っています。

鍼灸師　後藤　英二郎

2020 年 7 月 17 日(金)人吉市立第一中学校に AMDA 災害鍼灸メンバーとして赴く。前日の 16 日(木)の午前中に AMDA 災害鍼灸メンバーの吉井治先生より LINE にて要請を受けての参加。

仕事の都合上、17 日だけの参加となることも了承いただく。

被災地に泥かきや片付けのボランティアとして参加したかったが、今回は感染症対策という新たな問題に対し、一個人としての行動にも心理的制限がかかっており、もどかしさと悔しさを感じていた中での要請だったため、たった一日ではあったが、ありがたく参加させていただいた。

熊本地震に続き、二度までも AMDA に熊本入りしていただいたことに感謝の気持ちしかありません。

被災者に施術を行う 後藤鍼灸師

柔道整復師　平野　晃

今回初めて AMDA の活動に参加させていただきました。私は柔道整復師ですが、現在はその資格の仕事は一切していません。緊急支援活動も初めての経験でしたので、いささかの不安がありました。しかし、実際に現地に入ってみると、普段は全く違う職場や環境で働いている人達が、緊急支援の為に招集され、共に活動していることが分かりました。持ち場や立場は違えど、共通するのは「被災した人々の支援がしたい」という思いであり、その共通の思いを持った人々が、それぞれの資格や特性を活かし、共存して一つのチームとして活動する。まさに、AMDA のコンセプトの一つである「パートナーシップ」の形だと感じました。

今回の活動期間を通して本当に多くの被災者の方々に施術をさせていただくことができました。復興にはまだまだ時間がかかりますし、被災した方々の心の傷は簡単に癒えるものではありませんが、少しでも身体の不調の緩和や、痛みの軽減の手助けができたなら幸いです。今後も熊本や球磨村の状況を注視しながら、自分にできる支援を続けていきたいと思います。

テーピングを行う 平野柔道整復師

AMDA からの派遣者・赤磐市職員　　山田　章博

今回の災害では赤磐市としても被災地支援を行うこととなり、AMDA との合同チームで活動することになった。７月６日午後、総社市での出発式のあと、新幹線で岡山駅から熊本駅へ。熊本についてからも現地は大荒れの天候で目的地である人吉市に到着したのは翌日の午後 1 時となった。

先に人吉市に入っていた AMDA チームは球磨村のさくらドーム避難所で活動しているとのことだったので、まず球磨村の状況を調査することとした。調査の結果、物資が不足していたことが確認できたので赤磐市に報告を入れ球磨村に物資を支援することにした。

球磨村は大変な被害だったようで、村民が隣接する人吉市などの施設に避難しているような状況であった。AMDA チームは主に人吉市内の人吉第一中学校避難所で活動することになったので、私もその避難所に入ったが、球磨村職員の方たちは休憩することもままならない状態でその疲労度は限界に達しているのではないかと見受けられ、同じ公務員として他人事ではないと感じ、身の引き締まる思いであった。

数日後物資が到着したのでさくらドームに持ち込んだところ村長と面会でき、物資支援にきたところである事を伝え赤磐市長からの手紙と目録を手渡す。村長からは遠いところからありがとうございますと感謝の言葉をいただいた。

村長からは感謝の言葉をいただいたものの、物資の調達や岡山からの搬送に数日かかり、実際にその時点で被災地に必要な物だったのかなど、今後の支援方法について検討していく必要があるかと思う。

今回の支援を教訓とし、被災地の人が望まれる支援を念頭に置いたうえ、公金を用いた支援ということも考慮し、今後の災害地支援の方向性について検討していきたいと思う。

関係者らとの情報共有をする 山田調整員

協力者コメント

株式会社　なのはな／小規模多機能型居宅介護事業所　菜の花

施設長　　永尾　潤也

この度は、令和 ２ 年7月熊本県豪雨災害被災地の当施設に、多くの物資の支援を頂きまして、誠にありがとうございます。

お送りして頂きましたガーゼ、包帯、テープ、座布団、スリッパ、消毒液、手袋、ビニールエプロン、下着類、介護用の靴は被災された方々にご利用させて頂き、被災者の方々が大変喜ばれておられます。

当施設は、早急に復旧作業を行い ８ 月に営業を再開したものの、被災され家や衣類などを失い認知症をお持ちで避難所での集団生活が難しい行き場のない方々が頼って来られている状況です。

そのような中、今回ご支援して頂いた物資が非常に役立っております。

AMDA からの支援物資を受け取った 菜の花の皆様

被災して物資を入手するのは大変困難になっていきます。また物が売ってあっても被災され金銭的に余裕がない方は購入が難しい現状です。そのような中、ご支援頂いたおかげで、そういった方が非常に助かっておられます。これもひとえにAMDA様のご尽力の賜物と、御礼申し上げます。

2018 年西日本豪雨災害被災者緊急支援活動にてご協力いただいた「小規模多機能ホームぶどうの家真備」代表　津田　由起子様より人吉市内にある「小規模多機能ホーム菜の花」についてご相談をいただきました。
この施設が被災し全壊したが、８ 月の再開に向け準備を進めていること、しかしながら物資が足りないという状況を伺い、AMDA は物資支援を決定しました。

ご協力いただいた企業･団体からのコメント

―ご協力いただいた企業･団体―
（50 音順）

・菊池酒造株式会社　・公益財団法人 新日本宗教団体連合会

・合名会社 寒梅酒造・J.S.Foundation

・生活協同組合 おかやまコープ　・生活協同組合 パルシステム東京

・中外製薬株式会社　・天台宗務庁 一隅を照らす運動総本部

その他、多くの企業・団体、個人の皆様からご支援を頂きました。ありがとうございました。

菊池酒造株式会社

災害･戦火(おこらないことに越したことはありませんが)等起こった時のアムダの対応は常に迅速です。各地での活動を拝見する時、岡山県人として誇らしく思います。でもアムダがここまでしっかりした組織を構成し、迅速な対応がなされるまで、計り知れないご努力やご苦労があったのではないでしょうか。
今から三十数年前、代表菅波さんがアムダを設立される動機を、新聞だったかテレビだったかで目にした時、素晴らしいことをなさる方だなぁと、その行動力に感動致しました。
この度、コロナウィルス感染拡大で、手指消毒用に代替可能なアルコールを販売しましたところ、ご注文があり、その際何かお役に立てることはないかしら、と個人的に考えていましたら、会社が賛同して寄付の運びとなりました。
改めて、災害･戦火の起こらない世の中を願いつつ、特定非営利活動法人アムダの皆様の健やかな活動を心よりお祈り申し上げます。

公益財団法人 新日本宗教団体連合会

令和２年７月熊本豪雨により、犠牲となられた方々の御霊の平安と被災地域の早期復旧を心から祈念いたします。今回も、災害発生直後から被災者、被災地の支援に当たられた AMDA に当連合会の国際救援金から支援金を寄託させていただきました。
新宗連国際救援金は、国内外で発生する自然災害、人為的災害等による被災者の方々への救援活動並びに人道的救援活動等を行うために設置しており、近年では、東日本大震災、熊本地震、平成 30 年7月豪雨の被災に際し、緊急救援･復興支援に携わる NGO や地元の社会福祉協議会などに寄託させていただいております。
コロナ禍での救援活動、復興支援は困難も多々あるかと存じますが新型コロナウイルス感染症の一日も早い収束をお祈り申し上げますとともに、被災された方、復興にご尽力されている皆様には、安全に留意されご活躍されることをお祈念いたします。今後も支援の輪が広がり、一日も早い復興が実現されますことを願っております。

ご協力いただいた企業・団体からのコメント

合名会社

寒梅酒造

私たち寒梅酒造は、東日本大震災で多くの方のご支援を賜り、復興することができました。
私たちの会社コンセプトは「こころに春をよぶお酒」です。
日本での自然災害や疫病の中で、皆が幸せな日常を過ごせることを心より願っております。

そういった想いから、現在当蔵では日本中の方々へ少しでも皆の心に春が訪れますように、お力添えができればと思い、ご支援させていただいております。

人との出会い、繋がりに感謝。

J. S. Foundation

初めまして。ボランティア団体 J.S.Foundation と申します。
令和２年７月豪雨は日本各地に被害をもたらしました。特に熊本県内での被害が甚大であることを知り、被災された皆さまのお役に少しでも立ちたいと考え、AMDA 事務局に連絡をいたしました。早々に支援活動を行うとのお話をお伺いし、初動活動の支援金拠出をさせていただくこととなりました。数十年に一度と TV で連呼される災害が毎年のように発生する昨今、2016 年に発生した熊本大地震での復興も道半ば。そのような状況の中、今年は新型コロナウィルス感染症も加わり、被害にあわれた方のご心配、お気持ちはいかばかりかと思います。
ニュースを見るたび、被災地で救援活動している関係者の努力、姿は希望を与えてくれます。我々のような団体にできることは決して大きくはありません。しかし救援活動をなさっている方々を通し、日本中、世界中の方々が、被災された皆さまに心を寄せていることを知っていただけるよう今後も J.S.Foundation は活動を続けていきたいと考えております。

生活協同組合

おかやまコープ

令和２年７月豪雨で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。
おかやまコープは「困ったときはお互い様」という思いを大切に、13 年前AMDAと協定を締結し、共に被災地の支援を行ってまいりました。
令和２年７月豪雨では、コロナ禍で個人が現地ボランティアに赴くことも困難な中、これまで以上に皆が被災地の状況に心を痛め、自分にできる事を模索しておりました。そんな中、いち早くAMDAが医療支援チームを派遣され、組合員一人ひとりが思いを込めて積み上げた募金を役立てて頂けたことは殊のほか嬉しく、心より感謝しております。
刻々とニーズが変わる被災地の状況に合わせて機動力を発揮し、他チームとの連携や被災者とのコミュニケーションを大切にしながら活動されるお姿を拝見する度、私達の募金がその一助となっていることを実感し、支える喜びにつながっています。
これからもAMDAとのつながりを大切に、良きパートナーであり続けたいと願っております。

ご協力いただいた企業・団体からのコメント

生活協同組合 パルシステム東京

パルシステム東京は、『「食べもの」「地球環境」「人」を大切にした「社会」をつくります』を理念に事業活動を行う生活協同組合です。
協同組合の共助の精神に基づき、被災地が速やかな復興に向けて歩みを進められるよう、組合員へ「2020 年７月豪雨災害緊急支援募金」を呼び掛け、温かいメッセージと共に多くの募金が寄せられました。募金は、被災した産直産地や取引先、貴会をはじめとする支援団体などへ贈呈させていただきました。
新型コロナウイルスの影響で、現地入りが容易でない中、被災直後から地域と連携した避難所での診療と健康相談は、被災者の支えとなる貴重な活動であり、長引く避難生活を踏まえ行われた鍼灸活動等は、被災者の身体の疲労回復及びストレス軽減につながったものと思われます。
近年、日常生活に深刻な影響を与える自然災害が多く発生しています。引き続き緊急支援活動をされる貴会スタッフの方々のご活躍とご無事をお祈りしています。
このたびの「令和 ２ 年 ７ 月豪雨」により被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

中外製薬 株式会社

中外製薬は創業者の上野十藏が、関東大震災の惨状を憂い「世の中の役に立つ薬をつくる」という使命感を抱いたのが設立の始まりです。以来、「革新的な医薬品とサービスの提供を通じて新しい価値を創造し、世界の医療と人々の健康に貢献する」という企業理念の下、事業活動を行ってまいりました。それとともに、近年多発している大規模な自然災害におきましても、被災者の皆さまの救援や被災地の復旧のための支援にも尽力しております。「令和２年７月豪雨」においてもたくさんの方が被災され避難所生活を余儀なくされる中で、新型コロナウイルスの感染や健康への影響を懸念する声も多かったことと思います。
このような中、災害発生時にいち早く現場に駆け付けて、緊急支援活動から長期的な復旧支援まで地域に寄り添った活動を展開される AMDA は、私たち考える理想的な支援活動を具現化しており、その活動を支援することで、皆さまが健やかな生活を取り戻す一助となることを願っております。
被災された皆様のご健康と安全、被災地の一日も早い復旧と復興を心よりお祈り申し上げます。

天台宗務庁 一隅を照らす運動 総本部

令和２年７月豪雨災害により犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げます。
一隅を照らす運動総本部では、災害発生時における被災者救援医療活動への初動体制の確立とその後方支援に協力できるようAMDAに支援しております。
令和2年7月豪雨災害については、全国の天台宗寺院に義援金を呼びかけ、災害救助法の適用された9県並びに関係各所に寄託いたしました。
AMDAは伝教大師のお言葉にある「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」を体現されており、国内外問わず活動され、数多くの命を救われていることに対し、敬意を表します。
本年においてはコロナ禍での救援活動、復興支援は大変困難な状況であったと推察いたします。
そのような状況下で、活動されるAMDAに今後も微力ながらではありますが、協力をさせていただきます。
最後となりましたが、被災地域の一日でも早い復旧を心より祈念申し上げます。

職種別　派遣者・協力者一覧　*敬称略

■ 医師：派遣者　*派遣順

佐藤 拓史（さとう たくし）医師／東亜大学医療学部教授・AMDA 理事・
AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム運営委員会副委員長

頼藤 貴志（よりふじ たかし）医師／岡山大学大学院医歯薬学総合研究科疫学・衛生学分野 教授・
岡山県感染症対策委員会委員

■ 保健師：派遣者

岡本 美南（おかもと みなみ）保健師・調整員／AMDA 緊急救援ネットワーク

■ 鍼灸師：協力者

今井 賢治（いまい けんじ）鍼灸師／AMDA 災害鍼灸ネットワーク 代表世話人・
帝京平成大学 ヒューマンケア学部 鍼灸学科 教授

宮原 信晃（みやはら のぶあき）鍼灸師／熊本県人吉市下青井町 宮原はり灸院 院長・人吉市鍼灸マッサージ師会 会長

派遣者　*派遣順

吉井 治（よしい おさむ）鍼灸師・柔道整復師／AMDA 熊本鍼灸チーム

灰床 宗真（はいとこ ひろちか）鍼灸師／AMDA 緊急救援ネットワーク

後藤 英二郎（ごとう えいじろう）鍼灸師／AMDA 熊本鍼灸チーム・AMDA 緊急救援ネットワーク

■ 柔道整復師：派遣者

平野 晃（ひらの ひかる）調整員・柔道整復師／AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー・天理教道竹分教会

■ AMDA 本部からの派遣者：派遣者　*派遣順

橋本 千明（はしもと ちあき）看護師／AMDA 職員

高 和子（こう かずこ）看護師／AMDA 職員

山田 章博（やまだ あきひろ）調整員／岡山県赤磐市職員（AMDA 本部にて研修中）

岩尾 智子（いわお ともこ）調整員・看護師（米国資格）／AMDA 職員

相良村で戸別訪問を行う 岡本看護師

この報告書の作成には、明治安田生命保険相互会社の大塚 礼弓様、鎌倉 早希様にも
ご協力いただきました。ありがとうございました。

【編集後記】 就実大学 経営学部 道広 咲

今回インターンシップで AMDA に来て、初めてさせて頂いた業務が本誌の作成でした。
報告書を作成する中で、災害が発生してから迅速に対応するための体制づくりや、ローカルイニシアチブの考えに基づいた、現場のニーズに合わせた物資提供などに加え、新型コロナウイルスが流行し、様々な制限がかかる中で試行錯誤しながら行われた活動など、AMDA のリアルな活動の様子に触れることができ、非常に勉強になりました。
また、活動内容のみならず、支援活動に参加、協力した方たちの活動に対する想いにも触れることができました。被災地で活動される方はもちろん、現地にいなくとも様々な立場の人が「被災された方たちのために」という気持ちで、自分のできる事を少しでも役立てようと活動を行っていることを知り、この活動は助け合いがあってこそ成り立つものなのだということを強く実感しました。
私自身、元々災害支援に関心がありながらボランティアをするという一歩を踏み出せずにいましたが、本誌の作成を通して、今後自分にできる事を積極的に行っていきたいと思いました。

終わりに、本誌の作成という貴重な経験をさせて頂いたことに心から感謝いたします。